

## 第2回産業基盤部会発言要旨（4/22）

実質きょうから産業基盤部会の議論の始まりです。中小企業の振興を通して地域経済を少しでも良好な状態へという熱い議論をお願いしたい。議論を進める上で検討の視点案のほかに限られた時間で議論をいただくために事務局に細項目を作っていた。よろしくをお願いしたい。

検討の視点案がこれでいいか皆さんでご議論いただきたい。

視点案の中ではエネルギー政策としての視点でとらえるのは大きすぎるので、この部会での扱いについて議論が必要。

地域特性にも関わってくる。十勝は広いので大きなエネルギーが使われる。同時にエネルギーは世界的に問題で、十勝から色々な提言がなされている。補助事業でバイオマス燃料が検討され、工場も出来つつある。個々の企業もそれを抜きには、今後の事業を考えられない。明確に位置づけていくべきでないかと考えている。

地球規模のエネルギー問題もあるが、十勝は製造から消費までの取組みの枠組みで考えていくべきでないかと捉えている。

視点をどう置くかが重要。非常に難しいテーマと思う。イギリスで石油にバイオ燃料混合義務化の法律が出来るというニュースを見た。食糧をめぐってバイオと食の奪い合いになっている。世界で畑作4品目の全生産量の28%がバイオ燃料の原料に使われている。さとうきびはブラジルへ行けば5割近く、菜種は90%近くが燃料になっているが、それでも燃料の1%にすぎない。さらに割合を規程する法律ができると完全に食べるものがなくなる。それが果たして十勝の将来、日本、世界の将来にとって正しい方向なのか。バイオ燃料の出発自体が、不景気の時の農産物余剰対策なので、上手く整理する必要がある。バイオ燃料を大きな施策とするのは論議の余地があると思う。

今食べているものを燃料にするのではなくて、気仙沼ではコンブからエタノールをとることが始まっている。コンブを大量生産すれば食糧が奪われることがない。広尾沖にもメタンハイドレードが埋まっている。これを活用する。食料をそのままエネルギーにということだけでなく、石油資源に頼ってはいけぬ。余剰の畑からエネルギーをとれば、食糧に負担をかけるということはない。

あるレポートに食べ物をエネルギーに転化するのは限界、そうでない食べ物にならない

植物から転化することが大きな問題であろうと書いていた。温暖化の観点からは必要なかもしれない。

ここでの議論は温暖化ではなく、産業基盤の中でのエネルギーの位置づけである。運送会社にとっては安く車を走らせることができれば非常に有利で、そうした観点から検討する必要はないかと考えた。

そのような視点であれば問題はないと思う。

ビートかすからエタノールのような付加価値をつけていく話ならテーマになると思う。再利用してエネルギー化し、食べるものを減らしてということであればいいと考える。

エネルギーという大きなテーマではなく、もう少しより絞ったテーマにしてもらったらいい。

論議する場合は、整理が必要だ。今の議論で主張されていることは適切なことだが、共有していくためには時間が必要だと思う。

商工会議所の工業委員会でとかちバイオインダストリー構想がまとまっている。

エネルギーをいかに安く使っていけるのかというのは産業の基盤であることは間違いはない。

メタンハイドレードについては北見工大がロシアと共同研究をしているようコスト低減のノウハウや情報、また、固定費の削減という観点から議論してはいかがか。3から5年ぐらいのスパンで話をしていきたいと思う。

一昨日のある会合で話しを聞いたが、日本の製鉄会社がオーストラリアから購入する石炭の価格が釧路のコールマインの価格を上回ったので、また復活するかもしれないとのことであった。

検討の視点を今日決めるのでなく、資料をそろえて、環境基本計画、新エネルギービジョンなども作成しているので、バイオマスだけでなく自然エネルギーの活用を含め、そういった資料を用意し議論をさせていただきたい。

それでは、まずインフラについて検討の視点を参考にしながら議論を進めたい。

「産業集積」というのはどういうイメージか。新たな産業集積というのは、特定の場所に企業がわっと来るとのことか。

集約というのは工業団地というようなもの、これからの集積というのは、同業種が集約されている事例は木工団地というのがある。産業集積というのは一つの業種が一つの場所に集まっているというだけではない。一つの産業だけでなく、冷凍冷蔵倉庫の近くに関連業種が集まってくるのも産業集積。どうやって地元の企業が使いやすいものを集めていくかということではないかと思う。

ばらばらのものを集めるのは集約。集積というのはメリット、集積する意味があって集まってくるのが集積ではないか。

土地利用的に言うと、住宅地に工場が混在して立地している状態を工業専用地域に移転集約する政策で進めてきている。そのプロセスで地域になかった企業も立地している。西帯から芽室の一連の工業地帯、面積は 900 数十ヘクタールあり、北海道では苫東、石狩湾に次いで 3 番目の面積。それだけの面積に企業が立地していて、そこが競争力を十分もっているのではないか。競争力のある企業の集積というものが産業集積という意味合いでここでは使っている。今後企業立地を進める上で、より地域の全体の波及という観点から見た場合にどういったアプローチをしていけば、今まである産業も生かされていくような全体として高まっていくというような議論を中心に展開してもらえればありがたい。

工業団地の中で集積できているのか。ただ必然的に理由もなく立地していったのではないかと思う。考えるに、アクセスをキーポイントに置いた、産業集積というもの、核となる企業誘致も関係あるが、誘致した中で関連したインフラを進めていくということではないか。印刷業であると、印刷があって製本業があると集積。農業ももっと有意義なつながりがあるのではないか。

言葉の問題だが、集積には必ずしも集約が必須ではないのでは。集約の結果、集積という方法論はあるが、場所ありきで集約になるのか。言葉でいくとどうなのかなと思っていた。

建設業でいうと集約は必ずしも必要がない。同業種が集まってもあまりメリットはない。皆が一箇所に集まる必要がなく、現場が発生した時にそこに集まればいい。トヨタは外注が多く、集約されることによって効率の多い集積がされる。業種で違ってくる。

工業団地を推進してきたある人から、なぜこの団地が成功したか分かるかと聞かれたことがある。まちの中にある騒音、公害などを解決するため、特定のものでなく色々なものが入っている。意識的には配置を考えなかった。おおむね自動車産業が道路沿いに固まっているが、これからの行政から産業政策をみると、メッキ関係であれば合同でやると排水設備が出てくる。食品もそうだ。冷凍冷蔵倉庫などの業種があるから寄ってくるというのがある。そういう意識的なものを集積的、意識的に考え、作っていく、考えていく必要性が出てきているのではないか。元道経連会長の戸田さんは土幌農協に来た時、もっとも事例の説明し易い産業クラスターだといっていた。

言葉の定義が重要だと思う。意図ある集約化が集積だと思う。意図と戦略を持って計画的に積み上げていくので、そこにはシナジー効果、相乗的な効果を狙うべきである。産業集積と聞いて思い出したのが長野県の諏訪に精密機械が集まっている。財務体質が良好な企業がたくさん集積している。水、温度、人間性、勤勉性、閉鎖的で情報が外に漏れないという必要条件があって、さらに一番大事なことは貧しかったこと。地域の特性、資源、人柄それを考えた時、集積せざるを得なかったというのがこの地域だったようである。帯広・十勝の地域特性を考えた時、誰もが集積すべきは農業関連であると思う。例えばチーズなど。

頭脳集積ということを感じる。そこで大事になるのは人だ。ここで育て、研究者として成功させていく環境を作っていく。教育機関の集積もやっていかなければならない。農業高校があって畜産大学があって、第2畜産大学があって、そこに企業の研究機関が出てくる。これは頭脳集積。北方圏の農業政策を勉強するには帯広に行かなくてはというぐらいにならなければならない。

チーズを産業としてやるなら、チーズの生産加工に関わる人間、つまり技術的な側面、経営的な側面併せてもっと増やすことをやらなければならない。産業というには人材の安定的な供給体制がなければならないと思う。また、チーズのみではなくて、ピザパイへの利用など、色々組み合わせることがすそ野を広げていく。産業集積というには特定企業でなく、何社かでやる必要がある。そしてブランド戦略、マーケティングの重要性が増してくると思う。

地域特性を生かした産業集積というテーマでは、農業に関連した業種。横並びでいくと広く聞こえるので、地域内の優位産業を絞り込んでから、そこにぶら下がるものを考え、そこからメリットとコストが見えれば集積につながるのではと思う。横並びでいくと幅が広すぎる。

集積の議論はだいぶコンセンサスを得られたと思う。

チーズにしてもここでチーズを事業として起こすことでメリットがあるという。

ピザの話が出たので小麦について。十勝産の小麦を使った餃子の皮が作りたいという話をしたら、帯広市の最大のテーマが小麦で商工会議所でも進めている。そういう色々なところから整理したらいいかとなると、最後ブランドになると思うが。十勝ブランドとして集積が促進されるのではないか。

最先端で新たな製粉機械があるとの情報を入手し、見学にいったが、アメリカ、カナダと技術競争をしている。全粒粉という小麦すべてを粉にしてしまうという機械。ふだんは皮をとって粉にして食べる。外側が栄養価が高い。メタボ対策、健康志向性で注目されている。その機械が世の中に出てくると思うが、試作機がある。実際にその小麦を使ってパンをつくっている研究会があるので、何人かの人に全粒粉パンを食べていただいた。ドイツによくある黒いパン。朝ごはんとして食べるようなパン。そういうものを含めて製粉工場の誘致、この地域でどう製粉を実現するか考えているが、十勝支庁で小麦をテーマに一気通貫でやってみようというプロジェクトが動いているので、最終商品をつくるというところで関係機関とタイアップしようと考えている。

十勝の農業が連携していかなかったのは歴史的な問題。小麦の主産地が十勝になったのは最近であり、最初、とにかくまぜて消費したいということから始まった。何とか、自分たちで小麦を使って加工したいということになってきたのが最近。共販体制ととって、付加価値をつけるという意識が足りなかったのは歴史的経過としてしかたない。小麦は石臼でやるとどの品種かがわかる。もっともっと色々なものがあっていい。白いものがうどんと思っているので、新たな付加価値の付け方はある。それに対して取組む体制がなかったので大量生産大量消費になっている。それを中小企業が付加価値をつけていくのはまさに面白い。日本の中で単なる西洋でなくて日本人が好む洋風食文化が出来る可能性がある。チーズもそう。畜大も期待されているが、地域貢献すべきスタッフと学問を教えるスタッフとは必ずしも同じというわけではない。こういう形になったらいいという意見を出していただければいいと思う。

産業集積として一定の企業群が結びつき、大量生産と言わないが、関連企業でそこその量をやるという考え方と地域でコミュニティビジネス、スモールビジネスという考え方もあり、どう折り合いを付けるか難しい問題である。大企業を誘致し大量生産方式で規模の利益の追求を望むには限界がある。中小企業の振興をどうするかを考えた時、スモールビジネス、コミュニティビジネス、サステナビリティ、スロウ等が最近流行りである。例えば湯布院、黒川温泉がそれをやっている。場の理論というべき地域内での共同利用、連

携。機能分化しながら、温泉街として事業者が集積している。帯広・十勝で大企業に真似の出来ないところをどう地元で展開していくべきであろうか？

最初から最後まで一つでやると大企業になるので、一つひとつ役割分担をすることで集積になる。役割分担を中小零細企業が担っていけばいい。

それには住民のサポーターが必要。中小企業であれば、地元でサポートうけるところが多い。オーバーフローしたものが外に行くという発想の方がいいのではないかと思う。いきなり東京をターゲットにするのではなくて、地元の消費者、自分たちの考えを理解してもらうことが必要。豚井。地元で指示されてきた。それが地域の文化になる。地元で作ったものが限られていて、そのものを自覚していくことがものづくりの基盤として重要ではないかと思う。通常基盤とは違うが地域の意識形成の大事な部分になるのではないかと思う。

色々方向性が広い。これを絞りこんで形にするのが大変。意見集約するのも大変だ。

ビジョンがないと進まない。核になるものを、決めた時に何が必要になるかという議論をした方がいい。

食料基地である十勝からモノが出ていったきりで、それを自覚しないで育ってきた。農業王国、食糧基地というキャッチコピーが快いばかりになっていて、交流部会でも地産地消できないことがネックとなっている。必然性があればもっと楽。食料基地で加工して最終的に食べるところまでいくには相当な努力をしないと。産業規模として、チーズをやる場合は売上いくらないとやっていけないよという話しになる。藤丸でお菓子のフェアをやっていたが、これほどあるんだなと思った。お菓子で和洋幅広く食べられるのは帯広。お菓子屋さんを集積の結果でないのか。そうなるならたなモノよりも今あるものを敷衍していく努力も必要。